



## 年間第 16 主日 (マタイ 13:24-43)

ちよっと毒のある人いるよね

「畑には良い種をお蒔きになったではありませんか。どこから毒麦が入ったのでしょうか。」(13・27) ついつい取り除きたくなる要素を、辛抱強くそばに置きます。たとえイエスが教えようとしていることを見つけ、私たちの信仰生活に、教会生活に、活かしていきましょう。

新型コロナウイルスの感染が、平戸地区の行事にも影響してきました。今年の「福者カミロ・コンスタンツォ殉教祭」は協議の結果中止となりました。県内の感染者も増えてきています。8月の人の移動とか、政府のキャンペーンとか、様々なことで危険が増すと判断しました。

教会の行事を社会情勢で中止せざるを得ない。そんな時代が来ています。もし強行して多大な迷惑をかければ、私たちキリスト信者の行動は人々に理解されなくなります。ここは忍耐が必要です。

福音朗読に戻りましょう。僕たちは毒麦を取り除きたいと考えていますが、主人は「取り除く」のではなく「刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい。」(13・30) と命じました。私たちも、僕のような考えに傾き、僕が提案した行動を取ろうとするのだと思います。

このように考える私たちは、たとえ話の主人ではなく、僕なのだと思います。私たちの身の回りにも、「毒麦を抜いてしまおう」という考えや行動はたやすく入り込みます。たとえば、人材を集める必要があって、募集してみたら思いがけない人まで応募してきたとしましょう。

すると「この人がいたらやっかいだ」そういう考えが先に立ち、早めに手を打とうとするのではないのでしょうか。たとえば「人数が定員を超えたので何人かはお断りすることになります。人選はお任せください。」その後「毒麦」と考えるメンバーを取り除こうとするでしょう。

「刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい。」この世界では見る人の都合で、あるものが「毒麦」と見られてしまいます。たとえ話の主人は、見る人の都合ではなく、本性が現れて、みずからが毒麦であり、焼かれなければならない束であると正体を見せるまで忍耐して待ちます。主人の考えに立つと、両方とも育つままにしておけば、誰かが判断しなくても、変わらない本性の部分が現れて、どのように扱うべきか決まってくると言うのです。

たとえ話のまことの主人であるイエスは、「わたしに倣いなさい」と暗示しています。今は裁きの時ではなく、憐れみの時なのです。神は悪をうやむやにせず、いつか裁くでしょう。しかしイエスが再びおいでになり、収穫を命ずるまでは、憐れみの時、忍耐の時なのです。

イエスの思いに反し、急いで判断を下してしまい、「抜き集めよう」とする。人間的な判断で事態を丸く収めようとする。これらはイエスの思いを理解しない者のすることです。ここが、たとえ話を聞く人が「僕」に終わるか、「イエスの弟子」になるかの分かれ目です。

イエスの思いを知らず、イエスの前に立ちはだかる人は決してイエ

スの弟子にはなれません。イエスの再臨の時まで長く感じるかも知れませんが、私たちはよく観察し、見極めなければなりません。イエスがここまでして忍耐の時を過ごすそのわけを考えなければなりません。

忍耐の時を受け入れる。どんなに勇気の要ることでしょうか。勇み足で毒麦を抜くほうが、どれほどやりやすいでしょうか。なぜ「僕」のような考えに傾くのか。私たちがほぼ間違いなく、自分のことを「良い麦」と理解しているからです。「毒麦」「毒のある人間」「他人に害を与える人間」とは、夢にも思っていないからです。

たとえを語るイエスがこうまでして「両方とも育つままにしておく」のは、「私という毒麦」を収穫のときに束ねて燃えさかる火に投げ込まないためなのだ、もし一度でも考えるなら、イエスの忍耐に私たちも理解が及ぶのだと思います。実際、私を「毒麦」の立場に置いた方が、たとえ話はよりよく理解できるのではないのでしょうか。

「抜き集められても仕方ない」というような発言や行動を、私たちはこれまで一度もしたことがないのでしょうか。「あんなことを言ったり態度を取ったりしています。抜き集めておきましょうか。」私たちにほんのわずかでも、指摘される覚えがないと言うのでしょうか。

私が前任地にいた時、東北からの旅行者を熱心に五島に案内してくれる旅行会社の人がありました。最初のうちは教会訪問の申し込みを受け入れて、自由に教会訪問して行ってくださいと返事をして、直接会うことはありませんでした。

ある時たまたま聖堂内に用事があったら入ってみると、巡礼の引率者らしき人が聖堂内に入り込んだスズメを追い払おうとしていました。その時こんなふうには言っていたのです。「おーいスズメ、ここから出なさい。そうでないと焼いて食べるぞ。」

私はびっくりしてとっさに注意したのです。「スズメを焼かないでください。食べないでください。」彼は自分の発言を詫言しました。実はそれが縁で、その後この旅行会社のツアーの教会訪問を何度も受け入れることになりました。

彼はあのとき、軽い気持ちであんな発言をしたのかも知れませんが、けれども私はそれをすぐに罰しようとしたのでした。「毒麦を抜いてやったぞ」そういう気持ちだったかも知れませんが、あとで考えると、巡礼者も一緒にいる場で責任者を叱責するのは良くなかったと思います。

振り返ると、私は自分自身を「毒麦」とは思っていないでしたが、引率者を皆の前で叱る態度は「毒麦」の態度だったかも知れない。神の前に、神の僕から「抜き集めましょうか」と言われるのは私だったかも知れませんが、神はそれを制して忍耐し、今日まで、振り返りと反省の機会を与えてくれたのだと思います。

私たちは常にイエスの語るたとえ話の中に含まれています。けれども常に「良い麦」だとは限りません。「毒麦」の立場でもたとえ話を読み返し、よりイエスの忍耐を学ぶ必要があります。イエスの忍耐は、私を含むすべての人のいのちを守るためだからです。